The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	画家・李仁星の1930年代活動を中心に
Author(s)	姜, 恵蘭
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

画家・李仁星の1930年代活動を中心に

姜　恵蘭／京都工芸繊維大学博士後期課程

韓国の近代美術を語る上で，重要な人物のひとりである李仁星（1912～1950）は，東京太平洋美術学校出身の画家で，朝鮮美術展覧会の洋画部門にあわせて６回の入選と特選をはたし，「すぐれた才能を持った画家」として評価されている画家である。しかし，彼に対する関心と高い評価は今日まで続いているにもかかわらず，彼の制作や彼が活躍した当時の美術の状況についての学術的検証は，まだ詳しくはなされていないのが現状である。

本発表では，彼の在日時1930年代の制作活動に注目したい。

李仁星が日本に入学した1930年代は，東京美術学校，帝国美術学校，太平洋美術学校などの美術学校に洋画を学びに行く留学生が増えた時代である。そこで，まず，当時韓国で画壇がどのように形成されていったのかを整理し，その画壇形成に力を尽くした李仁星の日本留学時を中心に，彼の作品が日本の近代美術との関わりにおいてどのように変化していったのかについて考察した。

韓国を訪問した日本人洋画家として韓国を訪問した画家は鶴田五郎，高木背水，安藤仲太郎などが記録されている。彼らはソウルで日本人洋画家たちの集まりである洋画同士会を結成して展覧会を企画し，彼らの画室で韓国人を対象に洋画を指導していた。特に，高木背水は朝鮮美術展覧会にも参加していて，安藤仲太郎（1861年～1912年）は写生旅行中に韓国に到着し，宮廷の依頼で純宗の肖像画を描いた。1895年からは小学校に図画時間が作られ，一般の児童たちに写生が技術の一つとして教えられた。また，1909年東京美術学校図案科出身である日吉守が京城中学校美術教師として任命されたという記録などが残っている。1910年以後にはさらに多くの日本人美術教師たちが韓国内で教えたと考えられる。このような記録は，韓国洋画の伝来と韓国近代美術の始まりを研究する上で重要な資料になってくる。

植民地という時代背景の中で，韓国近代美術としての洋画は，日本の近代美術としての洋画から大きな影響を受けていた。1910年代に，画家達の日本への留学をきっかけとして洋画の導入が始まり，李仁星が活躍した1930年代は，当時西欧や日本で流行していた野獣派，立体派，抽象絵画などの新しい傾向を積極的に導入し，革新を試みようと努力した。また，海外に留学した画家達が新しい成果を持ち帰り，新しい美術団体が登場し，東京へ留学する画家の数が急増し，韓国画壇は，洋画導入の段階をすでに終えて，徐々に定着期に入っていった。

李仁星は，1912年８月大邱で生まれ，1928年10月世界児童芸術展覧会で「里の風景」を出品して特選し，若い頃から傑出した才能を見せた。1929年に朝鮮美術展覧会に初めて入選したときには，李仁星はまだ17歳であった。翌年以降も毎年入選し続け，1931年に「歳暮街景」で初特選を果たし，当時李仁星の才能を高く評価した慶北女子高等学校校長である白神壽吉の推薦で東京の王様商会に入社，1932年太平洋美術学校に入学した。第13回帝国美術展覧会で初入選した「夏の或る日」を初め，東京太平洋美術学校に在学していた1932年から，帝国美術展覧会や光風会の公募

展などに入選し，日本でも名声をふるった。

今年画家李仁星誕生100周年を迎えてソウル国立現代美術館で開かれている彼の展覧会では，「秋の或る日」「カイユ」「夏の室内」など絵画及びドローイングなど彼の作品90点と李仁星の息子イチェウォン氏が所蔵している日本からのはがきなどの関連資料約190点が展示されている。

李仁星の初期の作品は，全て水彩画であり，風景画が多く描かれていた。彼が本格的に油絵を描き始めたのは，日本に留学していた1932年からであった。この時期の作品では，近代化する都市風景を描いたものが多い。「聖塔」（1930年代）は，彼の故郷である大邱で有名な西洋式の建築で，桂山洞にある聖堂を描いたものである。彼にとって「聖塔」は新しく変転する近代都市の象徴のように感じられたのかもしれない。

日本の留学中多くの展覧会で入選をし，新式建物や室内と庭園風景など，色々な美術ジャンルを試していた彼の作風から多様な色彩感と共に，より大胆なタッチで画面全体を表現豊かに描いていたのが分かる。

李仁星が加入した日本水彩画のメンバーの春日部たすく（1903～1985），小堀進（1904～1975），荻野康児（1902～1973）との交流が挙げられる。特に春日部たすくは1932年王様商会社長に李仁星の帝国美術展覧会入選祝いはがきを送ったことでも有名であり，1936年頃には帰国した李仁星が設立した大邱にある洋画研究所に講師としても招聘された。

春日部たすくや小堀進によって設立された日本の水彩画連盟は日本の民族性を志向する作品を描いていた。李仁星の郷土的な関心もこの時期からより強く寄せられるようになったと考えられる。

朝鮮美術展覧会でもっとも高い評価を得た作品である「慶州の谷間にて」（1935）にも，郷土的なものに対する李仁星の愛着が感じられる。新羅の都であった古都慶州の自然と，そのなかにいる素朴な少年を主題にしたものである。画面の左に立って遠くの山からそれを見ている少年は，赤ん坊を背負った子守の姿で，このモチーフは李仁星が日本に留学してから数多く描いた。春日部の絵ではさび色で山を表現していて，李仁星の作品はより明るい赤土で画面全体を処理している。李仁星は，1934年の東亜日報に掲載したに「郷土を求めて」と題する文章のなかで，次のように述べている。「郷土のいきいきとした土の香りを嗅ぎながら歩いた。やはり私には赤土を踏むことが，精神的な安定を与えてくれる。まことにありがたい赤土の香りだ」。この李仁星自身の言葉が示すとおり，赤土の感触こそが，すなわち彼にとっての郷土のイメージであり，韓国の自然に合った風景を自分独自の表現として表している。

韓国の近代における美術概念の受容と実践のなかでも，とりわけ，展覧会の成立とそれにともなう近代画壇の形成は，日本の美術学校で初めて洋画を学んだ画家達によって始められ，彼らが自国で洋画を次の世代に教える中で展開していった。そのなかで韓国画壇において最も大きな影響力を持っていた画家が，1930年代に活躍した李仁星であった。李仁星は1932年から1936年日本に滞留しながら日本水彩画協会を通じて活動し，東京と大邱を往き来しながら日本の展覧会と朝鮮美術展覧会に出品し続けた。近代的な都市風景や室内，庭園風景など，さらに韓国の自然を独自的な色彩感で現した郷土的風景が李仁星作品の重要なモチーフとなり，これらの作風が韓国近代画壇の一つの手本となったと言える。